

「パワー・ゲーム」 ★★★

2014 (平成26) 年10月8日鑑賞  
GAGA試写室>

監督：ロバート・ルケティック  
原作：ジョゼフ・フィンダー『侵入社員』（新潮文庫刊）  
アダム・キャシディ（ワイアット社の若手社員）／リアム・ヘムズワース  
ジョック・ゴダード（アイコン社CEO（最高経営責任者））／ハリソン・フォード  
ニコラス・ワイアット（ワイアット社CEO（最高経営責任者））／ゲイリー・オールドマン  
エマ・ジェニングス（アイコン社のマーケティング部長の女性）／アンバー・ハード  
フランク・キャシディ（アダムの父親、元警備員）／リチャード・ドレイファス  
ジュディス・ポルトン（ワイアットの側近、行動心理学者の女性）／エンベス・デ  
イヴィッツ  
ケヴィン／ルーカス・ティル  
マイルス・ミーチャム／ジュリアン・マクマホン  
エージェント・ギャンブル／ジョシュ・ホロウェイ  
アリソン／アンジェラ・サラフィアン  
2012年・アメリカ映画・106分  
配給／東京テアトル、ハピネット

◆昔は良かった。大学を卒業して、良い会社に入り、15年も頑張れば、それなりの地位と収入が約束された。しかし、ワイアット社に入って6年目のアダム・キャシディ（リアム・ヘムズワース）は、今なお初任給のまま据え置き。このままでは、お先真っ暗だ。

本作冒頭にはそんなナレーションが流れるが、今やこんな「つぶやき」は、アメリカ、日本、中国に共通らしい。「司法改革」による法科大学院制度によってポロポロにされた、新しい司法試験制度の下での若手弁護士も全く同じだ。

◆今日、アダムはワイアット社のニコラス・ワイアット（ゲイリー・オールドマン）CEOの前で新企画のプレゼンを成功させることによって人生を変えようとしていたが、見事にそれに失敗。逆に、アダムはチームの仲間と共にクビ宣告されてしまうことに。ジョゼフ・フィンダーの『侵入社員』を原作とした本作は、そんな緊張感あふれる導入部から始まる。そして、アダムがワイアットから巨額の報酬とひきかえに、ジョック・ゴダード（ハリソン・フォード）CEOが経営するアイコン社に潜り込み、「産業スパイ」に変身していくストーリーはそれなりに面白い。

しかし、本作の展開を観ていると、いかんせんアダムの「若造ぶり」が明らかで、彼の実力はワイアットやゴダードのしたたかさには到底及ばないことが明らかだ。クビ宣告を受けて仲間と共にやけ酒を飲んだクラブで知り合い懇ろになった美女エマ・ジェニングス（アンバー・ハード）がアイコン社の腕利きのマーケティング部長だったり、アダムがアイコン社の幹部待遇の正社員として採用されるという話自体が、うますぎることにアダムはどうして気付かないの？さらに、豪華な新居の提供はたしかにうれしいだろうが、ハイテク企業で最先端の技術開発をしている男が、なぜ盗聴に気付かないの？これだから、今ドキの若者はバカ者だと言われるのでは・・・？

◆ニューヨークではブルックリン橋を挟んだ「こちら側」と「あちら側」では、同じ白人でも人種が違うらしい。つまり、アダムの父親フランク・キャシディ（リチャード・ドレイファス）は真面目に何十年間も警備員の仕事をやり遂げたが、それはしょせん「こちら側」の人間としての生きざま。「あちら側」に行かなければ、給料からお家まで上等な人種にはなれない。このままでは負け犬だ。それがアダムの信念だった。ワイアットはアダムのそれをうまく利用したわけだが、さてその価値観の是非は？

本作で少し不満なのは、アダムと同じ価値観を持っている「あちら側」の超エリート美女たるエマが、いとも簡単にアダムと懇ろになり、2人のラブストーリーを成立させてしまうこと。そうなるのは、やっぱりアダムが長身でハンサム、さらに、あっちの方面でも強かったせい・・・？

◆「産業スパイもの」といえば、昔は梶山季之の原作で田宮二郎が主演した『黒の試走車』（62年）をはじめとする『黒シリーズ』があった。最先端のモバイル事業を展開する巨大ハイテク企業の競争の厳しさは十分想像できるから、社員の引き抜きや情報争奪合戦、そして産業スパイの暗躍も想像できるが、殺人事件の続出は想定外だ。本作中盤には突然アダムの家をFBIが訪れ、「我々の捜査に協力せよ」と迫ってくるシーンが登場する。その場で「ハイ、わかりました」となるほどアダムはやワではなかったが、さて、その後のアダムのふらつきぶりは？

◆65歳の私は最近ドジをふむことが増えたが、72歳になったハリソン・フォードも、『エアフォース・ワン』（97年）当時の「切れ味」はない。また、『裏切りのサーカス』（11年）（『シネマルーム28』114頁参照）、『猿の惑星 新世紀（ライジング）』（14年）のゲイリー・オールドマンも、当初はカリスマ性タップリのワイアットを演じていたが、ラストに向けてはうろたえぶりが増えてくる。それとは逆に、中盤はあれほど頼りなかったアダムが、ラストに向けては仕事仲間たちの協力も得て鮮やかなお手並みを見せるから、それに注目！

それはそれで面白いのだが、本作に不満なのは、その展開がいかにも「出来レース」のように進んでいくこと。つまり、なぜアダムが急に利口かつしたたかになり、逆にワイアットとゴダードがなぜ急にボケていくのかについて、その「必然性」が見えないことだ。

◆さらに、最後はFBIの大捕り物(?)によって「めでたし、めでたし」となるのは、ワイアット社とアイコン社の情報争奪合戦が殺人事件にまで発展していたことを考えれば当然かもしれないが、映画としてはそんなあたり前の結末は邪道では・・・？

また、この貴重な体験によってアダムはやっぱり「あちら側」より「こちら側」の幸せを再確認するに至るといふ結末も、ちょっと小市民的すぎるのでは・・・。